The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	描く人の倫理と冒険 : われわれの問いのめざすもの
Author(s)	
Citation	形象. 2017, 2, p. 2-7
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/75793
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

＊形象論研究会綱領

描く人（ホモ・ピクトル）の倫理と冒険
――われわれの問いのめざすもの

形象を描く人

人間の本質を尋ねる哲学的人間学は、人間がいかなる点で他の動物から区別されうるのかを繰り返し問うてきた。人間とは、言語を話す人（ホモ・ロクエンス）であり、道具を工作する人（ホモ・ファーベル）であり、自発的に遊戯する人（ホモ・ルーデンス）である。だが、それだけではない。人は像を描く。「描くこと」とは、言語による認識と同様に現実を抽象化して把握することであり、道具を用いて形を生みだすことであり、時間と空間を制御しながら現実から遊戯的に距離をとることにほかならない。描くことにおいて、人間の根本的な能力がもっとも総合的な仕方で機能している。

もっとも、描くこととは、目に見える像の制作に限られるわけではない。言語の作用、あるいは音や身体の動きが生みだす一連の流れや、光と影の相互作用から成る非物質的で形の定まらないヴィジョンもまた、人間が描きだすものだといえよう。さらに重要なのは、過去を想起し未来を構想するという、人間の生の根本的な営為のうちに、すでに、世界を一つの連続態として描こうとする内的な作用、すなわち想像力が働いている点である。描くことは、これらすべてを含む包括的な意味での「形象（＝イメージ）」の創造と捉えられねばならない。人間とは、形象を描く人（ホモ・ピクトル）である。

描くことの自由と限界

ハンス・ヨーナスは、描く能力とは、現実から形相を引き離し、形相を、時間と空間の偶然性に翻弄されている状態から救い出し思うままに意味づけることのできる「自由」の能力であるとし、この自由に、人間と動物とを決定的に分かつ裂け目を見いだした。だが、描く自由が、人間と動物だけでなく、人間と神とを分かつ裂け目をも意味していたことを見逃してはなるまい。

旧約聖書の《創世記》が伝える神の天地創造は、「描く」ことによるのではなく、むしろ、「在れ」と命ずることによる創造であった。神は描かない。形象を描くという人間特有の営みは、聖性の冒瀆と真理からの離反の危険を孕んでいる。それゆえに、描くことは長い歴史のなかで幾度となく禁止され、否定されてきた。描く自由とは、いかなるものをも創造することのできる万能を意味しているのではない。人間の描く形象には、当初からある種の限界が刻印されていた。

描くことについての問いは、したがって、描くことの限界を見極め、その限界を侵す暴挙を注意深く抑制すること、すなわち、形象の倫理を尋ねる問いへとつながっていく。

倫理と冒険の弁証法

形象の倫理については、例えばホロコーストを表象することの不可能性をめぐって、すでに声高に議論されてきた。だがそこで問題なのは、クロード・ランズマンの映画『SHOAH ショア』（一九八五）がそうであったように、何を描くべきではない事柄とみなすのか、また、いかにしてその事柄の形象化を封じ込

めるのかを主張することに終始し、結局のところ、形象を描くという営みそのものの在るべき姿を省みることがなおざりにされている点であろう。

形象の倫理は、計り知ることのできないものに際して押し黙り、みずからの存在意義を不問に付す、その「慎ましさ」にのみあるのではない。われわれが目指すのは、形象の倫理のより積極的で実践的な次元を新たに切り開くことである。

そもそも、聖像をつくり礼拝することが禁止されたのは、それが神への冒涜とみなされたからだけではなく、像の持つ魔術的な力に惹かれることを人々が怖れていたからでもあった。人は、形象のなかに、たんなる形象以上のものをみようとしてきた。古い昔、プラトンが詩人の追放を唱えたのも、詩人の吟じるものがたんなる虚偽に留まらず、大衆を惑わす魅力を備えていることを見抜いていたからにほかならない。形象は、みずからの限界を越境する危険を冒すからこそ人を魅了する。形象の本質は、限界と越境の二律背反にあるといえよう。

人は、限界を持つ形象を、それでもなお描く。形象は、みずからの限界を越えゆく冒険性を欲している。必要なのは、形象の倫理の探求を、制すべき越境を問う次元から成すべき冒険を問う次元へと深めることであろう。描くことは、倫理と冒険の弁証法において展開する。描く人（ホモ・ピクトル）の自由は、倫理をふまえた冒険というパラドクスを生きる自由と捉え直されねばなるまい。

形象・想像力・人間形成

メディア・テクノロジーが加速的に発達する今日、われわれの生活世界に溢れる形象の種類と数はます

ます増大している。学問世界、とりわけ、理論科学や知覚を凌駕する超ミクロと超マクロの領域の事象を扱う科学においてもまた、研究対象の形象化が不可欠の問題として重要視されている。形象は、いまやもっとも広汎な領域を横断するトピックとなっている。こうした状況を受けて、ドイツ語圏を中心に一九九〇年代以降、形象に関するあらゆる事柄を汲み上げる新しい学際分野として「形象学 Bildwissenschaft」が成立し展開を続けてきた。われわれの探求は、こうした動向を背景として生まれたといってよい。

だが、問いの射程を際限なく拡張することが必要ならば、一方で、問いを収斂させることもまた必要であろう。われわれの問いを輪郭づけるのは、「形象 Bild」と語根を同じくする一つの問題領域である。ドイツ語では、「想像力 Einbildungskraft」という語だけでなく「人間形成（教養）***Bild***ung」という語もまた、「***Bild***」を語根に持つ。ドイツ語に特有の、形象・想像力・人間形成の三者の概念的な親和性は、描くという営みが、芸術の問題である以上に、人間の文化的な生の根本問題でありうることを端的に示している。

新しい人間学的美学に向かって

想像力とは、経験の限界を越えて未知の事態へと迫りゆくとともに、その事態をみずからに結び返し、自己自身の認識のうちに形象として深く刻み込む能力にほかならない。人は、このダイナミックな飛躍と回帰の冒険をとおして自己を形成していくのだといえよう。想像力と形象を巡るわれわれの問いは、他者や歴史を含む、もっとも広い意味での環境世界に向かってみずからを開こうとする人間の生の涵養、すなわち人間形成（＝教養）を巡る問いと結びつくこととなる。

ヴァルター・シュルツは、人間の本質をその精神性の内側に求めてきた点に哲学的人間学の曖昧さがあ

ると指摘した。人間の在り方を、むしろ環境世界との開かれた連関において問おうとするとき、ハンス・ブルーメンベルクのいうように、世界を形象として描きだし、メタファーとして読解することが必要となる。

われわれが目指すのは、哲学的人間学からのこのような要請に応え、描く人（ホモ・ピクトル）の倫理と冒険の探求から、新しい人間学的美学を醸成していくことである。

われわれの問いは、五つの方向を内包している

一、形象は、意味の媒体として機能している。形象がそれ自体で自足した媒体たりうることは、近代になってはじめて自覚された。近代という時代を、形象論のパラメータとして改めて省みることが重要となる。

一、とはいえ、近代を中心化・絶対化しようとするのではない。むしろわれわれは、近代が、その以前と以後とどのように連続しているのかを重視したい。そこで企図されるのは、美学史を「形象論史」として再解釈することである。

一、いわゆる美学理論とならんで、芸術論、さらには芸術家らが提出する議論もまた、重要な意義をもつ。見つめられるべきは、それらの相互作用にほかならない。

一、芸術の実践は、たんに、潜在する理論の実現形式ではない。実践という仕方でしか生成されえな

い論理があることをもまた、重視されねばならない。

一、各々の事象へと分化された個別研究が充実されねばならない。同時に、理論、実践、芸術の諸ジャンル、歴史、文化、政治、人間、環境を、未分化の総体として吟味しようとする総合研究の充実も計らねばならない。形象をめぐる問いは、個別と総合の弁証法において展開する。したがって本誌は、あらゆる著者、あらゆる読者へと開かれている。

二〇一六年三月

形象論研究会　発起人

三木　順子

柿木　伸之

高安　啓介

原　千史